

近年になり在日文学は、日本のみならず米国や韓国でもポスト植民地文学における「ハイブリディティ」、「ディアスポラ」といった用語とともに研究され始めている。生地より引き離されたことで、場所とその表現および表現媒体である言語それ自体も、文学のテーマとして抱え込むことになった在日作家のテキストは、環境文学研究における場所の表象を読み直す視点から、接続できるのではないかと考える。特に田舎/都市のパスラル論において言及されるような、再帰的に想像される空間と「今」を生きる場所の関係性が、在日文学における家郷/他郷においても見られるからである。しかしそこにおいては故郷(生地でない場合も含む)といった場所へのノスタルジアが屈折し、逆説的に地球への想像的な眼差しを批判的に構成する契機をはらんでいると考える。

本発表で取り上げる在日歌人、李正子は1980年代より『鳳仙花のうた』(雁書房)、『ふりむけば日本』(河出書房新社)、『葉桜』(河出書房新社)などで短歌やエッセイを発表し、2004年に『マッパラムの丘』(作品社)を出版した。近作の題名にある「マッパラム」という朝鮮語は向かい風を意味し、丘は著者が暮らす三重県伊賀上野の丘を指す。李正子はこの丘を「風峠」と表現し、この丘を行き交う風に様々な光の粒子、種子を見定め、「鳳仙花」や母の「ありらん」を聴き取りながら家郷と他郷の入り混じる場所を描いていく。こうした重なり合う場所の感覚は、向かい風(マッパラム)に、それを押し返す風が混じりあう形式においてよく表現されている。

李正子は「風」という言葉で、場所だけではなく異なる時代もつなげる複数のリアリティを描き出す。短歌という詩の形式で風景を叙情的に描くのではなく、叙事的な素材を詠むことで、李正子は人、場所、言語からなる風景を「風」の視点から読み直そうとしている。本論ではディアスポラにある歌人が複数の場所(日本、北朝鮮、韓国など)の憑依と葛藤しながら、環境(惑星)的思考を準備する過程について考察していきたい。

1. 『鳳仙花のうた』(1984)における場所の感覚

1984年に出版された『鳳仙花のうた』(雁書房)、歌題「アリアンの唄」において、60才になる父が「タヒャンサリ」を歌わなくなったという短歌が詠まれる。(27)タヒャンサリという言葉には語注があり、(185)他郷暮らしを意味すると説明される。

歪みつつ身は日本の土となる父はこの頃「タヒャンサリ」をうたわず

第二次世界大戦前の労働力不足を補うため、1919年頃に渡日した父は、日本各地の労働現場を転々とした後に母と出会い、1947年に生まれた李正子連れ三重県上野市に居を構えた。李正子が営む喫茶店の軒先に白桔梗(トラジ)を育てることが楽しみとしていた父が、「タヒャンサリ」をうたわなくなったことで生まれる家の静けさが、日本で生涯を閉じる予感と共に語られる。この直前におかれる短歌では、長屋にひっそりと咲く鳳仙花が詠まれるが、1950年代末より本格化する帰還事業によって空き家となった長屋の風景が、「タヒャンサリ」の歌の伏線となっている。住人がぼつりぼつりといなくなる長屋の風景は、タヒャンサリをうたわない父の身の歪み、つまり帰国をあきらめた他郷暮らしの暗澹たる思いを語る。その一方で作者は、空き家と対比される鳳仙花にその生命力の強さを見いだしてもいる。タイトルで使われる鳳仙花(ボンソナ)の語注で李正子は、(185)見た目の優しさ、はかなさをたたえる鳳仙花には、その種子が風で飛翔し、他郷に根付く強さがあると説明している。

風に運ばれた地で根付くという説明にある風は、日帝時代の植民地支配とそれに続く朝鮮半島の動乱を語り、他郷に根付くことを強いられた種子は、祖国と他郷のはざまを生きる身体である。この鳳仙花に付託される在日を生きる者においては、強いられて生きる場である他郷への思いと、引き離された家郷への丹心を同時に培ってしまう。しかし母と二世である娘の間には、「朝鮮」への思いに違いが生じている。(31)

皺深き母のもろ掌に触れたれば朝鮮の海と風が匂えり

母の掌にわが掌かさねるたまゆらを日本の土が匂う哀しみ

母の掌の「風」の匂いが、日本で生まれた私の掌によって失われかけるとき、母の故郷喪失が娘との関係においても生じる悲しみを作者は知る。娘における「朝鮮」への身体的な距離が、父母の帰国をおしとどめている可能性を作者は懸念した。歌題「国籍」、「血」で詠まれるように、この不安が作者にチマチョゴリ、エグッカ(愛国歌)、ハングルによる精神的な帰国の準備を始めさせる。しかし結局は「ウリマルもウリナラも」知らないうちに、(45)自分の子供が生まれる現実によって準備は中断する。ウリマル(母国)を知らず、ままならぬウリナラ(母語)に苦闘する李正子は、「血」で語られる家族、民族との間にもずれを感じている。

このように李正子においてはふるさとへの希求があるものの、それを押し返す育った場所の感覚、そして祖国分断という現実がある。(55)ここから生まれる帰還や帰化の「背後に虚構の国やある」という感覚は、(54) 帰る先への想像的参与を妨げている。「喪いしものをふるさと」と呼ぶ両親、(60) ハンセン病により他郷においてさらに隔絶された地に住む姉や姉の母(李正子の異母)にとっても、自然化された帰属感覚は身に付かないものであった。

放浪せしちちははが棲み吾も棲む帰化植物のごと日本に群れて

放浪した先で棲むことの実感が植物の比喩で示されるように、着生している事実だけがそこにある。(108) 作者にとっては名前ですら、自らの帰属先にならない。(136)

イ・チョンジャまた李正子或は香山いずれが名かと子が問いかける

こうした帰属感覚の欠如において、作者の語る鳳仙花の強さは、移動を余儀なくされた身体とは相容れない、帰属感覚への批判を内包していると考えられる。金時鐘の言葉を借りれば「共同体的共感の温床」への抵抗であった。(270)

2. 『マッパラムの丘』(2004)における向かい風と返し風

近作『マッパラムの丘』の題名にあるマッパラムは、向かい風を意味する言葉である。風峠と表現された作者の住む上野市緑ヶ丘を飛びかうこの風は、峠を越え、亡くなった父の出身地である晋州の「野火の丘」など幾つもの場所をかけめぐる。この風は時間の世界も飛翔し、「風の記憶」を運び込む。(13) 父の生地「野火の丘」では、秀吉侵攻の晋州が想起された。また過去だけではなく、未来へも風が吹いていく。例えば姉からもらった北窓のしらゆりが「風花飛天」し、(20) 詩集『草津アリラン』の作者、姉の母である香山末子へと結びつく。李正子の第一歌集『鳳仙花のうた』が評判となり、短歌が「国語」の教科書に載ったことが、半世紀ぶりに姉を実母に再会させたのである。李正子と姉は、異母姉妹であることを両親から聞かされていなかった。姉の母は、ハンセン病患者として群馬県草津近郊の施設に隔離されていたのである。

この発覚の驚きと再会の喜びは、一転、事情を亡き父に聞くことのできない痛哭となる。(126)

草津アリラン父のアリラン擦過して雲 風 雷一斉に震う

1981年冬発刊の『季刊人間雑誌 9』に金末子(香山末子)は、写真家趙根在のインタビューに答え、それまでの半生を咆哮に近い言葉で語っている。出版された3冊の詩集とこの記事が、親族に届くことはなかった。姉との再会の半年後、1996年に亡くなった香山末子の代わりに、李正子は風に呼びかける。(122)

めだま

指を返せ眼球を返せ死者のため風よ手となれ月よ眼となれ

異なる時代や場所、人間がつながる言葉の力に驚きを感じつつ、複数の場所に離散した同郷者への沈痛な思いが風に託されている。向かい風の吹く強い差配の世界を旅人(ナグネ)として生きる日々が、「返せ」と風に呼びかける返し風のうたとなった。このとき短歌は、ソーニャ・リャン(Sonia Ryang)がアンソニー・ギデンズ(Anthony Giddens)を参照して述べるように、「空間がますます脱一場所化される」状況を批判する社会詠となる。(Ryang 49)

在日一世の作家金石範は、生地である済州島について「ことばを詰めていえば、「私の原風景は故郷」というふうになるのだが、これは「郷愁」にも似てかなり湿っぽく、それに陳腐な感じがする。しかし、じっさいの私のなかの「故郷」はそのような情緒的なものではない。」と述べている。(金石範 228)これに対し李正子は、「私性の文学」(『鳳仙花のうた』影書房 34)である短歌への愛着をとおして、生地日本の情感に絡め取られていると言う。しかし「わび」、「さび」といった情感に憑依されながらも、李正子はその曖昧さにある批評性の欠如した、郷土中心的な排他性を知悉している。そこで『マッパラムの丘』の筆者は渚を歩きながら、「アイヌ、朝鮮、日本」が未分化であった言語の基層へと想いを馳せた。(108) 渚は様々な海岸からの寄物が流れ着く場であり、李正子は海上を漂う寄物に自己を投影し、地球(ほし)の人になりたいと希っている。脱一場所化の進む近代において、郷土中心的な抒情からずれることが、「地球(ほし)の悲鳴」を風に聴くといった環境思想を準備することになる。(116)

参考文献

金時鐘『在日のはざままで』平凡社、2001.

金石範『新編「在日」の思想』講談社、2001.

金末子、趙根在「聞書・川は涙となって」『季刊人間雑誌 9』草風館、1981. 165-95.

李正子『葉桜』河出書房新社、1997.

-----『ふりむけば日本』河出書房新社、1994.

-----『鳳仙花のうた』雁書館、1983.

-----『鳳仙花のうた』影書房、2003.

-----『マツバラムの丘』作品社、2004.

Ryang, Sonia. "The North Korean homeland of Koreans in Japan" in *Koreans in Japan: Critical Voices from the Margin*. Ed. by Sonia Ryang. London: RoutledgeCurzon. 2000. 32-54.